

16 『ずっと二人で歩いてきた』 成井豊

○ジャンル／ファンタジー

○ストーリー／桜井雨は18歳。大学に入学するため、長野から東京へとやってくる。引越しの日、アパートの窓の外から、ウッドベースの音が聞こえた。数日後の夜、アパートの前で、男が倒れているのを発見。それは上の階の住人で、大学生の栗原雅俊という男だった。雅俊を部屋に運び込むと、そこにはウッドベースがあつた！翌日、雨が雅俊の部屋を訪ねると、雅俊は中に入ることを拒んだ。雅俊には同居人がいたのだ。恋人？

○出演者／男3＋女2 計5
○上演時間／100分

登場人物

雨	雅俊	原田	樹里
優作	加治	多田	直人
北斗	筒井	将樹	
美栄子		坂口	理恵

① 栗原雅俊がやってくる。本を開いて、読む。

雅俊

僕はマサ。小学二年。お母さんとユウちゃんと、三人で暮らしている。ユウちゃんはお母さんの兄ちゃん、六年生で、何でもできる。お母さんが帰ってこない日は、ごはんを作ったり、洗濯をしたりしてくれる。ごはんはお母さんよりうまい。ユウちゃんのカルボナーラは、ファミレスより上だと思う。ある日、お母さんのお化粧の道具がなくなっていることに気がついた。タンスを見たら、服もなくなっていた。そう言えば、もう何日も帰ってこない。前に三日続けて帰ってこないことがあったけど、こんなに長いのは初めてだ。お母さんは家を出ていったのかもしれない。そう思ったけど、怖くてユウちゃんには言えなかった。次の日も、その次の日も、帰ってこなかった。やっぱり、僕たちは捨てられたんだ。とうとう我慢できなくなつて、泣いてしまつた。一度泣き出したら、止まらなくなつて、「お母さん！」と叫んでしまつた。すると、ユウちゃんが「お母さんに会いたいのか？」と聞いた。僕は「会いたい」と答えた。ユウちゃんは「お母さんは東京にいる」と言った。僕は「東京に行きたい」と言った。でも、心の中ではきつと無理だろうなと思つた。それなのに、ユウちゃんは「行こう」と言った。「俺たち二人で、お母さんに会いに行こう」

雅俊が去る。
三月二十一日夕、桜井雨の部屋。雨と早川北斗がやってくる。二人とも段ボール箱を持って
いる。

北斗

よし、後はトラックを返しに行けば、すべて終了だな。

雨

ありがとう、ホックくん。いろいろ手伝ってくれて。

北斗

いや、予想よりずっと楽だった。雨も一応、女の子だから、荷物がいっぱい

雨

あるだろうと思ってたのに。雨も一応、女の子だから、荷物がいっぱい

北斗

東京にいるのはたったの四年だからね。必要最低限のものだけあればいいと

北斗

思ってた、後は家に置いてきた。なるほどな。じゃ、最後におまえに一つ話がある。そこに座れ。

北斗

何よ。急に改まって。

雨

雨、俺はおまえが独り暮らしをすることに反対だ。

北斗

今さら何言ってるの？ たった今まで引越しを手伝ってたくせに。

雨

それは、おまえが大学を受験する時、約束したからだ。でも、あの時は、合

北斗

格したら、マリアさんの家に住むんだとばかり思ってた。

雨

お母さんの家は鎌倉だよ。大学まで二時間近くかかった。

北斗

二時間ぐらい何だ。近頃は、栃木や群馬から通う大学生だっているんだぞ。

雨

毎日、電車の中で映画が一本見られるんだ。ある意味、お得じゃないか。

北斗

私は無理。きつと体を壊しちゃう。

雨

そう言っつて、マリアさんに泣きついたのか？

北斗

まあね。お母さんは渋々許可してくれた。ただし、週末は必ず会いに行くつ

雨 北
斗

て条件つきで。
長野のおじいちゃんとおばあちゃん。
おじいちゃんたちも、お母さんの家に住むと思ってたみたい。でも、私が大学の近くに下宿したいって言ったら、「おまえのしたいようにすればいい」って。

北 雨

雨、おまえには女性の独り暮らしがどんなに危険かわかってない。

北 斗

そんなことはない。戸締りには十分気を付ける。

北 雨

甘い。都会には若い女性を狙う狼みたいな男がごまんといるんだ。俺の彼女が今、シカゴに留学してるのは知ってるよな？

北 斗

また翔子さんの話？

その翔子がミスター・レイノルズって教授のゼミに入ったんだけど、その教授がとっても優しい人で、授業のたびに翔子だけ残らせて、個人指導をしてくれたりしい。ところがある日、いきなり翔子を抱きすくめて、「アイ・ラブ・ユー」って囁いたんだ。もちろん、翔子は教授を突き飛ばして、帰った。翔子のやつ、電話の向こうで、「ホッくん、私、日本に帰りたい」って泣いてた。

北 雨

翔子さんもホッくんと呼んでるんだ。
話を逸らすな。俺が言いたいのは、どんなにおまえが気を付けたって、安心

北 斗

はできないってことだ。
でも、シカゴと東京は違うし。

雨

人口はシカゴより東京の方が多い。ということとは、狼の生息する数も多いんだ。だから、独り暮らしは止めて、家に来い。
ホッくんの所に？

北斗 親父もおふくろもきつと喜ぶ。俺だって、うれしい。
雨斗 でも、空いてる部屋なんかあったっけ？
北斗 俺の部屋を使えばいい。俺は地下の練習室に移る。昔は親父がドラムを叩いてたけど、今はただの物置になってるから。
雨斗 それだと、ホックんに迷惑がかかる。
北斗 おまえのことを心配しながら暮らすよりよっぽどマシだ。いいから、俺の家に来い。じゃ、荷物をトラックに運ぶぞ。
雨斗 えー？ せっかく全部下ろしたのにな？

そこへ、栗原雅俊がやってくる。

雅俊 あの。
北斗 どちら様ですか？
雅俊 僕はこのアパートの住人です。ドアが開きっぱなしだったんで、勝手に入ってきちゃいました。
北斗 ドアが開いてても、チャイムを鳴らすのが礼儀だと思いますが。
雅俊 そうですね。すみません。
北斗 それで、ご用件は？
雅俊 (写真を差し出して) これがアパートの入口の所に落ちてました。
雨斗 (受け取って) 父の写真です。イヤだ。いつの間に。
北斗 (写真を見て) 靴跡がついてるな。俺の靴だ。
雨斗 ホックン、お父さんの顔を踏んだのね？
北斗 待て待て。俺が踏んだってことは、落としたのはおまえってことになるぞ。

雅俊
北斗

自分で落として、自分で踏むのは不可能だからな。(雅俊に) そうですよね？
それは落とし方によると思いますけど。
何ですって？

雨

ホツくんは少し黙ってて。(雅俊に) わざわざ届けてくださって、ありがとうごさいました。

雅俊

いや、自分の部屋に行くついででしたから。じゃ、僕はこれで。

雨

あの、あなたもこの階にお住まいですか？

雅俊

ええ、僕は二〇三号室。この部屋の隣です。

雨
雅俊

私、桜井雨です。よろしくお願いします。
栗原雅俊です。じゃ。

雅俊が去る。

北斗

今、心の中で、素敵な人だなんて思っただろう？

雨

素敵っていうか、親切で礼儀正しい人だなんて。

北斗

甘い。一見、親切で礼儀正しく見える男の方がかえって危険なんだ。あいつ、

雨

チャイムを鳴らさずに入ってきただろう？ 中におまえ一人しかいなかった

雨

ら、襲いかかるつもりだったのかもしれない。

北斗

それはさすがに考えすぎでしょう。

雨

でも、可能性はゼロじゃない。あんなやつが住んでる所に、おまえを置いて

北斗

おくわけには行かない。さあ、荷物を運ぶぞ。

雨

いやだ。私はここで暮らすって決めたの。

雨 ホツくん、聞いて。私はもう十八だよ。来月、誕生日が来たら、十九になる。

北斗 もう子供じゃないの。

雨 知ってるよ。だから、余計に心配なんだ。

北斗 お父さんと約束したから？

雨 そうだ。俺は朝晴さんに、雨を守ってくれて頼まれたんだ。

北斗 おじいちゃんもおばあちゃんも同じことを言ってた。おかげで、私は今日まで

雨 何の苦労もしないで生きてこられた。そのことは本当に感謝してる。でも、

北斗 このままじゃいけないと思うんだ。

雨 いつまでも子供扱いするなっていうのか？

北斗 違う。お父さんが最後に言ってたの。俺はおまえに世界一幸せになってほし

雨 い、それが俺の夢だ。でも、幸せって、他の人に与えてもらうものじゃ

北斗 ないよね？ 自分の力でつかむものだよ？

雨 だから、一人になりたいのか？

北斗 そうじゃない。そうじゃなくて……。

雨 ベースの音が聞こえる。

北斗 ウッドベースだ。このアパートの住人かな。

雨 もしかすると、栗原さんも。

北斗 さっきの男か？ あいつはジャズよりクラシックってタイプだろう。

雨 この曲、お父さんがよく弾いてた。

北斗 雨、おまえ、朝晴さんのベースは持ってこなかったんだな。最近、弾いてな

北斗 いのか？

雨

北斗

雨

北斗

雨

高三になって、音楽部を引退してからは一度も。でも、その前から、迷ったんだ。いくら練習しても、うまくなれないから。

諦めるのは早いんじゃないか？

それからずっと考えてるんだ。私にとって、何が幸せなのか。私は何がしたいのか。

雨。でも、見つけなきゃいけないの。自分の力で。

雨が去る。

①北斗が本を開いて、読む。

北斗

次の日、僕とユウちゃんは朝五時に起きて、家を出た。僕は飛行機で行くんだとばかり思っていたが、ユウちゃんは電車で行くと言った。その方がずっと安いから。札幌駅に着くと、ユウちゃんは函館までの切符を二枚買った。いきなり東京までの切符を買って、途中で失くしたりしたら、大変だから。ユウちゃんは本当によく考えている。僕は生まれて初めて特急電車に乗った。スーパ―北斗。カッコいい名前だ。函館で、違う特急に乗り換えた。今度はL特急はつかり。こっちはイマイチだ。電車に乗っている間、僕はずっと窓の外の景色を見ていた。何時間見ても、全然飽きない。でも、青函トンネルに入ったら、壁しか見えなくなつて、知らない間に、居眠りしてしまった。目が覚めたら、ユウちゃんの姿がなかった。ビックリして、探しに行ったら、トイレから出てきた。ユウちゃんが「荷物は？」と聞くから、「持ってこなかった」と答えたら、「バカ！」と叫んで走り出した。座席に戻ったら、リュックはあつたけど、中に入れておいた財布はなくなっていた。僕はユウちゃんに「ごめんなさい」と言った。胸が詰まって、息がでなくなつた。ユウちゃんは僕の肩をつかんで、グラグラ揺らしながら言った。「大丈夫だ、マサ。俺に任せろ」

三月二十二日夜。アパートの前。雅俊がやってくる。突然立ち止まり、しゃがみ込む。そこへ、雨がやってくる。

雨 大丈夫ですか？

雅 俊

雨 どうか苦しいんですか？ 胸ですか？ お腹ですか？ 救急車を呼びましょ

うか？

（首を横に振る）

雨 我慢しない方がいいですよ。顔色だって、ひどいし。

雨 この顔色は生まれつきなんだ。しょっちゅう、病人に間違われる。

雨 でも、どこか苦しいんでしょう？（携帯電話を取り出して）やっぱり、救急

車呼びます。

雨（雨の手をつかんで）口を閉じて。

え？ どうして。

雨 君の声が頭にガンガン響くんだ。しゃべるなら、もう少し小さい声で頼む。

雨（小声で）ごめんさい。私が慌てちゃいけないのに。

雨 そういう時は深呼吸をしないといい。ゆっくり三回。

雨（深呼吸を三回する）

雨 どうだい？

雨 少し落ち着いたみたいです。

雨 僕も少し楽になった。これなら、何とか部屋まで行けそうだ。

雅俊が立ち上がる。が、よろめく。雨が雅俊の腕をつかむ。

雨 やっぱり、病院へ行った方がいいと思います。

雅俊 僕は病気じゃない。疲れが貯まると、時々こうなるんだ。たっぷり寝れば、次の日は元通りになる。

雨 じゃ、部屋まで一緒に行きます。二〇三号室でしたよね？

雅俊 ありがとうございます。

雨 どういたしまして、栗原雅俊さん。

② 雅俊の部屋。雨と雅俊がやってくる。雅俊が椅子に座る。

雨 お水、入れてきましょうか？

雅俊 冷蔵庫にペットボトルが入ってる。

雨 了解。

雨が去る。雅俊が部屋の中を見回す。

雅俊 ユウちゃん？ いないの？

雨が戻ってくる。ペットボトルとコップを持っている。

雨 お待たせしました。今、入れますからね。（コップに水を入れて）はい、ど

うぞ。（コップを差し出す）

雅 雨 雅
俊 俊

ありがとう。(ペットボトルを取って) そっちは君。
あ、どうも。いただきます。(飲む)

(飲んで) あー、生き返った。今日までに提出しなきゃいけないレポートがあつて、それが朝までかかっちゃってね。二時間だけ寝て、出かけたんだけど、ずっと体が重かった。で、ついさつき、限界に達したってわけだ。

行き倒れにならなくて、よかったです。
手間を取らせて、悪かったね。でも、もう大丈夫だから。
じゃ、私はこれで。あ、その前に、一つ質問してもいいですか？
構わないけど。

このベース、栗原さんのですよね？ ひよつとして、お仕事はベーシスト？
違う違う。ベースは単なる趣味。大学に入ってから、弾き始めてね。でも、
なかなかうまくならない。

そんなことないです。プロに負けないぐらい上手だと思います。

君の部屋まで聞こえたの？

隣の部屋だし、窓を開けっ放しにしてたから。

僕も開けっ放しにした。弾き終わってから、気が付いたんだ。悪かったね、
迷惑をかけて。

迷惑じゃないです。私の父もベースを弾いてたんですけど、あの曲が大好き
で、よく聞かせてくれました。

お父さん、プロのベーシストだったの？

そうです。五年前に亡くなりましたけど。栗原さんの腕は、父に引けを取ら
ないと思います。

それはちよつと褒めすぎだよ。いくら何でも、プロに勝てるわけない。じゃ、

雅 雨 雅
俊 俊

雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊

そのコップ、いいかい？

ご馳走様でした。(コップを雅俊に渡して) じゃ、私はこれで。あ、その前に、もう一つだけ質問。

今度は何だい？

失礼ですけど、栗原さんは誰かと一緒に住んでるんですか？

誰かって？

たとえば、恋人とか。

まさか。この部屋を見れば、わかるだろう。独り暮らしだよ。

でも、さつき、誰かに呼びかけてませんでしたか？ 私をお水を取りに行つた時。

さあ、そんなことをした覚えはないけど。

でも、私の耳には、「ユウちゃん、いないの？」って。

桜井さんは大学生？

はい。あ、今はまだ違います。来月、入学するんです。

そのために東京へ出てきたんだ。

そうですね。実家は長野なんです。栗原さんは今、何年生ですか？

大学院の一年。来月から二年になる。

ということは、二十三歳？

そう。質問はこれで終わりかな？

ごめんなさい。具合がよくないのに、長々とお邪魔しちゃって。

いや、君と話したおかげで、大分気分がよくなった。でも、念のために、早

めに寝ることにするよ。

そうしてください。じゃ、お大事に。

雅俊 おやすみ。

雨が去る。

雅俊 (手足を動かして) 不思議だな。何だか体が楽になった気がする。あの子と話をしたからかな。

そこへ、榎山優作がやってくる。

優作 何してるんだ、家の中で。

雅俊 ラジオ体操第一。これ、まじめにやると、結構いい運動になるんだ。

優作 運動嫌いのおまえがなぜラジオ体操なんか。原因は今、ここから出ていった、女の子か？

雅俊 ユウちゃん、会ったの？

優作 なかなかかわいい子だったな。大学の後輩か？

雅俊 ハズレ。あの子はこのアパートの住人。昨日、引っ越してきたんだ。

優作 なるほど。引っ越しの挨拶に来たのか。昨日、引っ越してきたんだ。

雅俊 それもハズレ。僕、さっき、アパートの入口で気分が悪くなっちゃって。そこへ、あの子が通りかかって、部屋まで連れてきてくれたんだ。

優作 そのわりに、元気そうじゃないか。

雅俊 あの子、意外と話好きでね。ベラベラしゃべりまくるのを聞いてるうちに、疲れが取れたみたい。そうそう、あの子のお父さん、プロのベーシストなんだって。五年前に亡くなったらしいけど。

優作 雅俊 優作 雅俊 優作

優作 雅俊 優作 雅俊

彼女の名前は？

桜井雨。

桜井朝晴だ。

有名な人なの？

野中マリアって知ってるだろう？

リン・エイジって知ってるだろう？ ジャズシンガーの。彼女は最初、アスピ

ドでベースを弾いていたのが桜井朝晴だ。

ユウちゃん、その人の演奏、聞いたことあるの？

ある。アスピリン・エイジのCDは全部持つてるからな。

僕も聞いてみたい。

わかった。今、探してやる。

雅俊・優作が去る。

① 雨がやってくる。本を開いて、読む。

雨

切符はユウちゃんが持っていた。でも、お金がないと、盛岡から先には行けない。ユウちゃんは盛岡で電車を降りると、ホームの自動販売機の下を覗き込んだ。「何してるの？」と聞いたら、「金が落ちてるかもしれない。おまえも探せ」と言った。そんなふうに行くかと思っただけ、僕もやることにした。でも、いくら覗き込んだり、一つも見つからない。と思っただけ、ユウちゃんが百円玉を見つけた。しかも二つ！ユウちゃんは券売機で一番安い切符を買った。七十円の切符を二まい。でも、これだと隣の仙北町までしか行けない。ユウちゃんは「何とかなる」と言っただけ、僕は心配でたまらなかつた。おまけに、お腹まで空いてきた。駅の時計は三時を指していた。気にしないようにしようと思っただけ、そう思えば思うほど、苦しくなってきた。僕がお腹を押さえていると、ユウちゃんが「腹が減ったのか？」と聞いた。僕がうなずくと、ユウちゃんは「ちよつと待ってろ」と言っただけ、キヨスクに行った。キヨスクのおばさんが他のお客さんの相手をしている間に、パンを二つ取った。でも、おばさんは気が付いて、「こら！泥棒！」と叫んだ。ユウちゃんが「マサ！逃げろ！」と言いながら、走ってきた。僕は走った。

三月二十三日夕、雨の部屋。北斗がやってくる。雨は本を読んでいる。

北斗 知ってたか、その本？

雨 題名だけはどこかで見た気がする。（表紙を見て）『ユウとマサ』。確か、賞を取ったよね？

北斗 児童文学の新人賞だ。帯に書いてあるだろう。

雨 （帯を見て）「現役東大生、作家デビュー」。嘘。栗原さんて、東大生だったの？

北斗 最後のページに略歴が載ってる。

雨 （裏表紙をめくって）「栗原雅俊。一九八九年十二月生まれ。北海道苫小牧市出身。東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程在籍」長い。

北斗 あいつ、俺より一つ年下だったんだな。敬語を使って、損した。でも、凄いやね。理系の人が児童文学を書くなんて。まるで、宮沢賢治みたい。

北斗 今、心の中で、ますます素敵な人だなんて思っただろう？

雨 だって、本当に素敵じゃない。栗原さんはベースも上手なんだよ。神様って、本当に不公平だよな。

北斗 なぜ俺を見る。さては、俺とあいつを比較したな？

雨 してない。自分と栗原さんを比較したの。確かに、あいつは頭がいい。とすれば、すべてが計画だったって可能性もある。昨夜、アパートの前で動けなくなったのは、仮病だった。おまえを自分の部屋に連れ込むために、一芝居打ったんだ。

雨 北斗

でも、栗原さん、本当に気分が悪そうだったよ。甘い。俺が初めて翔子の部屋に行った時も、最初は玄関までって約束だったんだ。ところが、そこで突然、激しい腹痛が俺を襲った。

雨 北斗

一芝居打ったのね？

雨 北斗

男ってというのはな、恋のためなら、どんなやつでもロバート・デ・ニーロになるんだ。

雨 北斗

はいはい、わかりました。で、ホックくんはこの本、もう読んだの？

雨 北斗

読んでない。昨夜、家に帰ったら、リビングのテーブルにその本を置いてあ

雨 北斗

って、表紙を見たら、栗原雅俊って書いてあるじゃないか。ビックリしたよ。

雨 北斗

おふくろに聞いたたら、「私を買った。物凄くおもしろかった」って褒めるか

雨 北斗

ら。

雨 北斗

自分も読んでみようと思ったわけ？

雨 北斗

歌の歌詞と同じで、小説には作者の手柄が出るからな。それに、この小説は

雨 北斗

実体験が元になってるらしいし。

雨 北斗

『ユウとマサ』のマサって、栗原さんのことなの？ これ、貸して。

雨 北斗

ダメダメ。俺が読み終わってからだ。

雨 北斗

いつ読み終わる？

雨 北斗

（雨の手から本を取って）二百五十ページってことは、二十五日後だ。

雨 北斗

そんなに待てない。（北斗の手から本を取って）一日で読むから、今、貸し

雨 北斗

て。

北斗が去る。

② 三月二十四日夕、アパートの前。雅俊がやってくる。

雨 雅 雨 雅 雨 雅 雨 雅 雨 雅 雨 雅 雨 雅
俊 俊 俊 俊 俊 俊 俊 俊 俊 俊 俊 俊 俊 俊

お帰りなさい、栗原さん。

この前は悪かったね。いろいろ迷惑をかけて。

私の方こそ、長居しちゃって、すみませんでした。

桜井さんはこれからお出かけ？

いいえ。窓から栗原さんの姿が見えたんで。

それでわざわざ迎えに出てきてくれたの？

（本を出して）これの感想が言いたくて。

僕の本、買ってくれたんだ。

ごめんなさい。買ったんじゃないかって、借りたんです。引越しの時、手伝い

に来てくれた人に。

ああ、君の彼氏。

違います。ホックくんは、あ、あの人の名前は早川北斗って言うんですけど、

父がお世話になっていた人の息子で、子供の頃から兄妹みたいに仲良くして

て。

じゃ、今度ホック君に会ったら、お礼を言わないと。

いいですよ、お礼なんか。それより、この本ですけど、とつてもおもしろか

ったです。読み出したら止まらなくなっちゃって、一晩で読んじやいました。

お褒めに預かり、恐縮です。

この本に出てくるマサって、栗原さんですか？

そうだよ。僕は子供の頃、マサって呼ばれてたんだ。

じゃ、ユウちゃんは？

僕の兄。本名は優作っていうんだ。

雨 雅俊

じゃじゃ、二人で札幌から東京へ行ったのも、実際にあったこと？全部、事実だよ。もう十五年も前の話だから、多少の記憶違いはあるかもしれないけど。

雨

この続きが読みたいって思いました。二人がどうなったか、知りたいです。次の小説はもう書いてるんですか？

雅俊

書いてない。今のところ、書く予定もない。

雨

え？ 栗原さんは作家としてデビューしたんじゃないんですか？

雅俊

文章を書くのは子供の頃から好きだった。でも、今の僕の本業は研究だからね。

雨

じゃ、どうしてこの本を書いたんですか？

雅俊

人に無理やり勧められて。

雨

それってユウちゃんですか？

雅俊

どうしてそう思うんだ？

雨

別に理由はないけど、ユウちゃんとは今でも仲がいいんでしょう？ ここにもよく来るんですか？

雅俊

それより、君に聞きたいことがあったんだ。君のお父さんの名前は？

雨

桜井朝晴ですけど。

雅俊

やっぱりそうか。昨夜、CDを聞いてたら、その名前を見かけたんだ。君のお父さんはアスピリン・エイジのベースリストだったんだね。野中マリアと同じバンドにいたなんて、凄いやないか。演奏も凄かった。感動したよ。

雨

本当ですか？ 父が聞いたら、きっと喜びます。

雨

感動したよ。

雨

感動したよ。

そこへ、栗原美栄子がやってくる。バッグを持っている。

美栄子 雅俊 美栄子 雨 美栄子 雨 美栄子 雨 美栄子 雨 雅俊 美栄子 雅俊 美栄子 雨 美栄子 雨 美栄子 雨 美栄子 雨 美栄子

雅俊。

お母さん、何しに来たの？

あなたに会いに来たのよ。決まってるじゃない。

家を出る前に、連絡してくればよかったのに。

どうせ来るなって言われると思ったから。それより、そちらの方は？

隣の部屋に住んでる桜井さん。つい最近、引越してきたんだ。

（美栄子に）桜井雨です。よろしくお願ひします。

雅俊の母です。桜井さんは大学生？

来月、早稲田大学の文学部に入学します。

じゃ、年はまだ十八？ 雅俊より五つも年下ってこと？

ええ、それが何か？

雅俊とはいっ知り合ったの？

ここに引越してきた日だから、三日前です。

それにしても、やけに親しげに話をしてたわね。

お母さん、その言い方は失礼じゃないかな。

でも、私の目にはそう見えただもの。まるで、グリコのコマーシャルの三

浦友和と山口百恵みたいだった。

たとえが古くてよくわからないけど、お母さんは完全に誤解してる。桜井さ

んと話をするのは、これが二回目なんだ。（雨に）そうだよね？

正確には、三回目です。

話って、どんな？

（本を示して）私、昨夜、栗原さんの本を読んだんです。だから、その感想

雅俊

を。

美栄子

(美栄子に) 桜井さんはおもしろかったって言ってくれた。僕の本を褒めてくれたんだよ。これで、誤解は解けたね？

この人がただのファンだってことはわかった。(雨に) ごめんなさいね。おかしな疑いをかけて。でもね、雅俊。私が誤解したのは、あなたのせいよ。

あなたが苦小牧に帰ってこないのは、こっちに好きな人がいるせからじゃないかって。

そんな人はいないよ。

美栄子

本当に？

雅俊

本当だって。まあ、話は部屋に行ってからにしよう。(雨に) じゃ、僕たちはこれで。

雅俊・美栄子が去る。

雨

そうか。栗原さんには今、好きな人がいないんだ。

雨が去る。

①美栄子がやってくる。本を開いて、読む。

美栄子

僕は盛岡駅を飛び出した。目の前にロータリーがあった。僕がキョロキョロしている、ユウちゃんが追い抜いて、「ついてこい！」と叫んだ。僕はユウちゃんの後を追った。しばらく走ると、橋の上に出た。ユウちゃんが立ち止まって、振り返って、「もう大丈夫だ」と言った。そして、僕にパンを突き出した。僕は盗んだパンなんか食べたくなかった。でも、ユウちゃんは僕のために盗んだんだ。だから、僕はユウちゃんのために食べた。あんパンはあんまり好きじゃなかったけど、なぜかとてもおいしかった。僕たちは食べながら歩いた。食べ終わっても歩いた。地図は持ってなかったけど、道路標識を見れば、どっちが東京かわかった。喉が渴くと、札幌駅で買ったペットボトルのお茶を飲んだ。やがて、空が暗くなってきた。足も痛くなってきた。痛くて痛くて、もうこれ以上歩けないと思った。でも、歩いた。知らない間に、涙が出ていた。ユウちゃんが僕の顔を覗き込んで、「ヒッチハイクをしよう」と言った。通り過ぎる車に向かって、親指を立てた。でも、車は停まらない。ユウちゃんが「生まれ！」と叫んだ。でも、車は停まらない。突然、ユウちゃんが車道に飛び出した。車道の真ん中で、両手を広げて、「生まれ！」と叫んだ。そこへ、トラックが走ってきた。

美栄子が去る。
三月二十五日夜、雨の部屋。雨がやってくる。携帯電話を持っている。

雨

あ、お母さん？ 雨です。：：：入学式？ 大学全体のは四月一日だけ。：
：：：いいよ、無理して来なくて。：：：でも、お母さんが来ると、目立つのよ。
この前の卒業式だって、毛皮のコートなんか着てくるんだもん。：：：別に恥
ずかしいとは思ってないよ。：：：本当だって。私は野中マリアの娘でよかつ
たと思ってる。：：：もう、泣かないでよ、お母さん。

ベースの音。雨が窓の外を見る。

雨

：：：え？ 今、何て言った？ ；：；わかった。でも、できるだけ地味な服を
着てきてね。：：：あ、ちよつと待って。これ、聞こえる？（携帯電話を窓の
外に向けて）隣の部屋に住んでる人が弾いてるの。なかなか上手だと思わな
い？ ；：；そう。：：；ううん。プロの耳を信じる。ありがとう。じゃ、入学
式の日。

雨が携帯電話を切る。

雨

私はうまいと思うんだけどな。そうだ。

② 雅俊の部屋。雅俊がやってくる。

雨 雅
俊

どうしたんだい、こんな時間に？
(CDを差し出して)これ、よかったら、聞いてください。父が亡くなる直前に録音したものです。

雨 雅
俊

(受け取って)自分で録ったの？

雨 雅
俊

引越しの時、私と一緒にいた人、覚えてますか？

雨 雅
俊

ああ、ホックんだっけ？

雨 雅
俊

そうです。ホックンのご両親は吉祥寺でライブハウスをやってるんです。父

雨 雅
俊

はそこで月に一度、ライブをやってて、必ず録音することにしてたんです。

雨 雅
俊

後で自分で聞くために。

雨 雅
俊

自分の演奏をチェックしてたんだね？

雨 雅
俊

家に帰ってから聞くんですけど、出来が悪い時はアーとかウーとか唸ってま

雨 雅
俊

ました。でも、その日はわりとうまく行ったみたいで、ヒヤッホーって言っ

雨 雅
俊

ました。

雨 雅
俊

ありがとうございます。後で聞いてみるよ。

雨 雅
俊

今、ベースを弾いてましたよね？

雨 雅
俊

しまった。また窓が開けっ放しだった。ごめんね、勉強の邪魔だったろう。

雨 雅
俊

勉強なんかしてません。一人でボーっとしてたんです。だから、栗原さんの

雨 雅
俊

演奏をもっと近くで聞きたいと思って、お邪魔したんです。

雨 雅
俊

僕の演奏なんか、人にお聞かせするレベルじゃないよ。

雨 雅
俊

そんなことないです。私も中二から高二まで弾いてたから、わかります。栗

雨 雅
俊

原さんは上手です。少なくとも、私よりはずっと。

雨 雅
俊

褒めてくれてありがとうございます。でも、今日はもう遅いし、また今度にしよう。

雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊 雨 雅俊

でも、まだ弾き始めたばかりじゃありませんか。実は昨夜も徹夜しちゃってね。今日は早く寝たいんだ。どうしてそんなにいやがるんですか？ それだけ上手なら、恥ずかしくないのに。

僕はあがり症でね。人前だと、実力の半分も出せないんだ。

だったら、慣れた方がいい。どんどん人前で弾いた方がいいですよ。

ごめん。この話はもう終わりにしてくれないか。

わかりました。私の方こそ、しつこくねだったりして、すみません。

いや、いいんだ。

父のCD、聞いてくださいいね。返すのはいつでもいいですから。じゃ。(歩き出す)

桜井さん。

(立ち止まって) 何ですか？

君は誤解してるんだ。今、弾いていたのは、僕じゃないんだよ。

え？ でも。

僕にはベースが弾けない。五年前から弾き始めたけど、ちっともうまくな

なくて。

じゃ、誰が？ もしかして、お兄さんですか？

どうしてそう思うんだ？

だって、この前来た時、ユウちゃんて。

そう。今、弾いてたのは、兄なんだ。高校生の頃から、プロのベーシストを

目指してて。

お兄さんはどこに？

雅俊

雨

雅俊

雨

雅俊

雨

雅俊

雨

雅俊

雨

そこへ、優作がやってくる。

帰った。君が来る前に。

でも、私がノックした時、まだベースの音が聞こえました。

そんなはずはない。

お兄さんはまだここにいるんでしょう？ 奥の部屋ですか？

僕は帰ったと言ったはずだ。

会わせてもらえませんか、お兄さんに。

どうして。

話が聞きたいんです。ベースのこと。栗原さんが書いた小説のこと。栗原さんのこと。

それは僕が話すよ。

私はお兄さんから聞きたいんです。栗原さん、私をお兄さんに会わせてください。

優作

雨

雅俊

雨

雅俊

優作

雨

雅俊

俺に何が聞きたい。

ユウちゃん！（雨に）いや、何でもない。

そこに、お兄さんがいるんですね？

いないよ。見ればわかるだろう。

（雨に）君には俺が見えるのか？

（雅俊に）私にはお兄さんは見えません。でも、栗原さんには見えるんじゃないですか？

バカなことを言わないでくれ。

雨 雅 優
俊 作

雨 雅 優 雨 雅 優 雨 雅 優 雨 雅 優
俊 俊 作 俊 俊 作 俊 俊 作 俊 俊 作

待てよ。この子は気づいてるのかもしれないぞ。
気づいてるって？

今、誰に向かって、言ったんですか？ お兄さんですよね？

(雅俊に) やっぱりそうだ。この子は俺の正体に気づいてる。

(雨に) 君は気づいてるのか？ ユウちゃんが。いや、兄が。

お兄さんは亡くなってるんですね？ 幽霊なんですかね？

驚いたな。この子、全然、ビビッてない。

(雨に) もしそうだとしたら、君は信じるか？

信じます。

君には見えないのにな？

変ですか？

変だよ。普通は信じない。て言うか、バカバカしいって大笑いする。

(雨に) バカバカしいと思わないのか？

思いません。だって、五年前は私にも見えたから。

五年前？

父が亡くなった時です。父は台湾で亡くなりました。でも、私に会うために

帰ってきてくれました。私のことが心配で。父は私と一緒に暮らしました。

その間、私には父が見えたし、話もできた。たったの十日だったけど、私に

とっては最高に幸せな時間でした。

だから、ビビッてないのか。

(雨に) だから、怖がらないんだね？

ええ。だって、お兄さんは栗原さんを守るためにここにいてるんでしょ？

そんな人が悪いことをするはずがない。

優作

雅俊

優作

雅俊

優作

雅俊

優作

雅俊

優作

雅俊

優作

雨

雨・雅俊が去る。

いい子だな、この子。

(雨に) 初めてだよ。兄の存在を信じてくれたのは、君が初めてだ。

マサ、通訳しろ。

通訳？

俺の言葉をこの子に伝える。(雨に) 俺は榎山優作。ユウちゃんと呼んでくれ。

桜井さん、今、兄が君に向かって、こう言った。「俺は榎山優作。ユウちゃん

んて呼んでくれ」

それはちよつと。優作さんじゃダメですか？

ダメだ。

(雨に) ダメだ。とユウちゃんは言った。

わかりました。初めまして、ユウちゃん。桜井雨です。

① 優作が本を開いて、読む。

優作

トラックはユウちゃんの一メートル手前で停まった。運転席の窓から、金髪のおじさんが顔を出して、「バカ野郎！」と怒鳴った。ユウちゃんは運転席に駆け寄って、「乗せてください！」と叫んだ。おじさんは最初は怒っていったけど、ユウちゃんの話の聞くうちに、だんだん声が小さくなって、最後には「乗れ」と言ってくれた。ユウちゃんと僕は助手席に乗り込んだ。おじさんは金髪だけど、日本人だった。おまけに、おじさんじゃなくて、お兄さんだった。年は二十二歳で、名前は柏田さん。東京から青森へ荷物を運んで、今はその帰り道だった。ユウちゃんが、お母さんに会いに東京へ行くと言うと、柏田さんは目から涙をポロポロこぼした。そして、前沢のサービスエリアで天ぷらうどんをご馳走してくれた。車に戻ると、僕たちは食後の仮眠を取った。そして、また出発した。でも、僕は知らない間にまた寝てしまつて、ユウちゃんに起こされた時には、外が明るくなつていた。僕たちは両国駅の近くで、トラックを降りた。降りる時、柏田さんが一万円札を一枚くれた。そして、「ガンバレよ、マルコとアメデオ」と言った。全然意味がわからなかつたけど、僕たちはトラックが見えなくなるまで、手を振った。両国駅から電車に乗った。お母さんがいる八王子まで、あと少しだ。

四月一日夕、雅俊の部屋。雅俊がやってくる。

雅俊

ただいま。

優作

どうだった、結果は。

雅俊

合格。ていうか、向こうの方から、ぜひお願いしますすって、頭を下げてきた。

優作

成績が上がるたびに、ボーナスを出してくれるってさ。

雅俊

さすがに、開業医の家は違うな。

優作

これで家庭教師が四件。塾の講師が一件。何とか生活していけると思う。

雅俊

問題は大学の授業料だな。本の印税だけじゃ、足りないだろう。

優作

児童文学は売れないからね。印税だけで何とかしようと思ったら、今年中に

雅俊

あと三冊は出さないと。

優作

もつと売れる本を書いたらどうだ。ガリレオ・シリーズみたいなやつ。

雅俊

無理だよ。ミステリーは読んだことないし。

優作

二、三冊読めば、コツがつかめるだろう。

雅俊

僕はそんなに器用じゃない。『ユウとマサ』だって、一年もかかったじゃないか。

優作

わかった。授業料は、俺が何とかする。

雅俊

ダメだよ。人のものには手をつけるのは。

優作

人に迷惑をかけるのはよくないことだ。でも、たとえば、今日、おまえが行

雅俊

ってきた開業医の家は。百万や二百万なくなっただって、どうってことないだ

雅俊

ろう。

優作

でも、もしバレたら？ 犯人は僕ってことになるんだよ。

雅俊

優雅 優雅
なぜバレる。俺はおまえ以外の人間には見えないのに。
ダメだ。泥棒は絶対にいけない。
優雅 優雅
だったら、自分で金を稼ぐ方法を考えろ。俺はガリレオを勧めるがな。

チャイムが鳴る。雅俊がドアを開ける。

雨 優雅 雨 優雅 雨 優雅 雨 優雅 雨 優雅 雨 優雅
こんにちは。
へえ、今日はずいぶんキレイな恰好をしてるな。
（雨に）そうか。今日は入学式だったんだね？
雨 優雅 雨 優雅
そうです。ユウちゃん、いるんですか？
雨 優雅 雨 優雅
ああ、そこに。君のこと、キレイだって言ってるよ。
雨 優雅 雨 優雅
え？ 本当ですか？ ありがとうございます。
雨 優雅 雨 優雅
悪いが、俺は服がキレイだって言ったんだ。
（雨に）総選挙に出れば、一位間違いないだ。って。
雨 優雅 雨 優雅
それは服のおかけじゃないかな。この服、母が買ってくれたんですよ。私は
いらないうって言ったのに。入学式だって、さんざん断ったのに、出席して。
雨 優雅 雨 優雅
本当に過保護なんです。
雨 優雅 雨 優雅
長野からわざわざ駆けつけてくれたの？
雨 優雅 雨 優雅
いいえ、母は鎌倉に住んでるんです。父とは、私が三歳の時に離婚したんで。
雨 優雅 雨 優雅
あの、別に隠してたわけじゃないんですけど、私の母は野中マリアなんです。
雨 優雅 雨 優雅
今、何て言った。野中マリアって、あの野中マリアか？
雨 優雅 雨 優雅
ユウちゃん、落ち着いて。
雨 優雅 雨 優雅
これが落ち着いていられるか。野中マリアにこんなにデカイ娘がいたなんて。

雅俊 優作 雅俊 雨 雅俊 雨 優作 雅俊 雨 優作 雅俊 雨 優作 雅俊 雨 優作 雅俊 雨 優作 雅俊

今まで失礼な態度を取って、済まなかった。お母さんによろしく伝えてくれ。
（雨に）お母さんによろしく伝えてくれ。

ユウちゃん、母のファンなんですか？

実はそうなんだ。家にあるアスピリン・エイジのCDは、全部ユウちゃんが買ったんだ。

ありがとうございます。母が聞いたら、きっと喜びます。

いやいや。それより、君の両親はどうして離婚したんだ？

桜井さん、失礼なことを聞くようけど、君のご両親はどうして離婚したの？
母が家を出たんです。私を育てることより、音楽を取ったんです。

それは君がいくつの時だ？

（雨に）それは君がいくつの時？

三歳です。でも、私は全然寂しくなかった。いつも父がそばにいたから。

苦労したんだな、君は。

（雨に）君はお父さんと二人で暮らしてきたんだね。だから、お父さんは亡くなつた後も、君のそばにしようとしたんだ。

そうです。私を守るために。

でも、たつたの十日で、君の元を去つたのはなぜ？

私が貧血で倒れたんです。それで、幽霊が生きてる人に触ると、その人の生命力を奪うってことがわかって。

ユウちゃん、知ってた？

いや、初耳だ。

（雨に）もしそれが事実だとしても、僕らには関係ないな。ユウちゃんが僕に触ることなんてないし。

雨 雅俊

雨

雨 雅俊

雨 雅俊

雨 雅俊

雨 雅俊

雨 雅俊

雨 雅俊

雨 雅俊

雨 雅俊

雨 雅俊

この前、気分が悪くなったのは？

あれは前の晩に徹夜したからだよ。大体、僕らは何年一緒に暮らしてると思う？

そう言えば、それが聞きたかったんです。ユウちゃんはいつ亡くなったんですか？

五年前だよ。バイクの事故で。

五年も一緒に暮らしてなのに、何の影響もないんですか？

見ての通りだ。顔色以外はどこも悪くない。

本当だな？

僕がユウちゃんに嘘をつくわけないだろう？

あ。(携帯電話を取り出して) メールだ。ホツくんからです。今、私の部屋の前にいるって。

約束でもしたの？

私、これから、ホツくんの家に行くんです。ホツくんのご両親が入学祝いの食事会をしてくれるって言うんで。あの、もしよかったら、雅俊さんも一緒に来ませんか？

僕も？

あと、できれば、ユウちゃんも。俺も？

(雅俊に) ホツくんのお母さん紹介したいんです。霧子さんというんですけど、『ユウとマサ』を読んで、雅俊さんの大ファンになったみたいで。

残念だけど、僕はこれから用事があるんだ。

何だよ、用事って。

出版社に、次回作の話をしに行くんだよ。急いで書かないと、まずいだろう？
それはそうだな。

（雨に）だから、今日は行けない。せっかく誘ってくれたのに、ごめん。
わかりました。じゃ、かわりに、お願いがあります。

何だい？

雨 雅俊 雅俊さんじゃなくて、ユウちゃんに。今度、演奏を聞かせてもらえませんか？
入学祝いとして。

優作 断る。

雅俊 どうして。

雨 雅俊 桜井朝晴の娘の前で、弾けるわけないだろう。この俺が。

雨 雅俊 （雅俊に）ユウちゃん、何て言ったんですか？

雨 雅俊 もう少しうまくなつてからにしてくれって。

雨 雅俊 今だって、十分うまいのに。

雨 雅俊 そうか？ いやいや、おだてて弾かせようたって、そうは行かないぞ。

雨 雅俊 （雨に）ごめんね。ユウちゃんは一度言い出したら、聞かないんだ。

雨 雅俊 わかりました。ユウちゃんが弾いてもいいって思うまで、待ちます。

雨 雅俊 ホッくん、待ちくたびれてるんじゃないか？

雨 雅俊 いけない、忘れてた。じゃ、行ってきます。

雨が去る。

優作 驚いたな。あの子、おまえだけじゃなくて、俺まで友達だと思ってやがる。
雅俊 ユウちゃん、うれしいんだね？

優作
雅俊
優作

野中マリアの娘だけあって、なかなかの美人だからな。
だったら、ベース、弾いてやればよかったのに。
冗談じゃない。「父と比べたらまだまだですわね」なんて言われたら、俺、絶
対に死にたくなる。死んでるけど。

② 雅俊・優作が去る。
アパートの前。雨・北斗がやってくる。

北斗

ちよつと待てよ。おまえ、今、何て言った。

雨

だから、雅俊さんはお兄さんと一緒に暮らしてるの。私たちが聞いたベース

北斗

は、お兄さんのユウちゃんが弾いてたのよ。

雨

でも、お兄さんは五年前に死んだらう？ ホツくんだって、お

北斗

死んでも、幽霊になれば、ベースは弾けるでしょう？

雨

父さんがベースを弾いたり、ごはんを食べたりしたのを見たじゃない。

北斗

見たよ。え？ 雨にはお兄さんが見えたのか？

雨

見えない。でも、雅俊さんが通訳してくれたから、話はできた。

北斗

本当に間違いないのか？ からかわれてるだけじゃないのか？

雨

どうして素直に信じてくれないの？

北斗

信じられるわけないだろう。幽霊なんて、朝晴さんが成仏して以来、一度も

雨

会ってないんだから。

そこへ、雅俊・優作がやってくる。

雅俊

桜井さん！ 君に一つ、言い忘れたことがあった。何ですか？

雨俊

(小声で) 僕の兄のこと、他の人には黙っててくれないか？ ホツくんにも？ すみません。たった今。

北斗

(雅俊に) すみません、聞いちゃいました。遅かったか。

雅俊

まあ、いいじゃないか。話が広まって、マスコミが押し寄せてきたら、冗談でしたって、謝ればいいんだ。

雅俊

呑気だな、ユウちゃんは。お兄さんは今、そこにいらっしゃるんですか？

北斗

ユウちゃんと呼んでくれ。そのかわり、ホツくんと呼ぶから。(北斗に) ユウちゃんと呼んでくれ。そのかわりに、ホツくんと呼ぶから。

優作

そう、兄は言ってます。行こう、雨。親父とおふくろが待ってる。

雨俊

(雅俊に) 行ってきます。行ってらっしゃい。

雨・北斗が去る。

優作

(雅俊に) おまえ、何だか、明るくなつたな。そうかな。

雅俊

雨ちゃんのおかげだ。不思議な子だな。俺にはあの子が太陽みたいに眩しく見える。名前は雨なのに。

① 雨・北斗がやってくる。本を開いて、読む。

雨・北斗

八王子駅で電車を降りて、バスに乗り換えた。九つ目の停留所で降りて、今度は歩いた。初めて来た場所なのに、ユウちゃんは迷わない。電柱や表札に書かれた番地を見ながら、ズンズン進んでいく。十分ほどで、古いアパートに辿り着いた。階段を昇って、二階に行く。一番奥の部屋の前で、ユウちゃんは立ち止まった。やっと着いた。お母さんはこのドアの向こうにいるんだ。ユウちゃんがチャイムを押した。でも、誰も出てこない。二回押しても、三回押しても、出てこない。「留守みたいだな」とユウちゃんが言った。「帰ってくるまで、待とう」。アパートの向かいに、小さな公園があった。僕はブランコや滑り台で遊んだ。でも、すぐに飽きてしまって、ベンチのユウちゃんの隣に座った。ユウちゃんはアパートの入口をジッと見ている。僕は座っているのに飽きると、また遊具で遊んだ。座ったり遊んだりを何回も繰り返した。何回も何回も。でも、とうとう疲れてしまって、僕はベンチの上に戻った。突然、「マサ！」という声があった。目を開けると、ユウちゃんの顔。周りは薄暗くなっていた。アパートの入口に、三つの人影が見えた。三つ目はお母さんだった。僕とユウちゃんはアパートへ走った。階段を駆け昇って、一番奥の部屋のチャイムを鳴らした。

四月二日夕、雅俊の部屋。雅俊・美栄子がやってくる。

雅俊 僕は先週、何て言った？ 今度来る時は必ず前もって連絡してくれって言つ

美栄子 たよね？

美栄子 覚えてるよ。でも、私はうんとは言わなかった。

雅俊 僕にだって、予定があるんだ。今日はこれから家庭教師に行かなきゃいけないし。

美栄子 いいよ、行ってきなさいよ。私はテレビでも見てるから。

雅俊 帰りは十時過ぎになる。お母さんはとくに寝る時間だろう？

美栄子 じゃ、話は明日の朝にしよう。お父さんには、明日の夜までに帰るって言つ

美栄子 てあるんだ。

雅俊 話って、また来年のこと？

美栄子 そうよ。先週、家に帰ってから、お父さんと相談したの。でも、私たちの結

美栄子 論は変わらない。

雅俊 僕の結論も変わらないよ。

美栄子 それはあまりに勝手すぎるんじゃない？ あなたは五年前に何て言った？

美栄子 四年で卒業して、必ず苦小牧に帰るって言ったよね？ それなのに、四年経

美栄子 ったら、あと二年延長してくれなんて言い出して。あなたはあの時、約束を

美栄子 束を破ったのよ。

雅俊 それについては反省してるよ。

美栄子 だったら、今度こそ、約束を守りなさい。

雅俊 あの時は二年でいいと思った。でも、事情が変わったんだ。

美栄子

雅俊

美栄子

雅俊

美栄子

雅俊

美栄子

雅俊

美栄子

そこへ、優作がやってくる。

優作

美栄子

優作

雅俊

教授に残ってくれて言われたんでしょう？ でも、それは教授の都合であつて、あなたには関係ないことじゃない。

先月、助手の檜橋さんが交通事故に遭つたんだ。とてもひどい怪我で、当分復帰できそうにない。おかげで、うちの研究室は今、てんてこ舞いの状態なんだ。教授には一年の時からずっとお世話になってきた。その教授に頼まれたら、イヤとは言えない。

じゃ、私が言つてあげる。明日の朝、教授の研究室に連れて行って。僕の身にもなつてくれよ。お母さんが研究室に来たら、みんなに何て言われるか。

雅俊、本当のことを言つて。あなたはもう苦小牧に帰らないつもりなんじゃないの？

そんなことは考えてない。博士課程が終了したら、必ず帰る。信じられない。あなたはお父さんの跡を継ぐのがいやになつたのよ。違う。

だったら、どうして小説を書いたの。あなたは本当は酪農家になんかなりたくない。小説家になりたいんでしょう？

その通りですつて言つてやれよ、マサ。

ねえ、どうなの、雅俊？

ほら、マサ。

お母さん、僕は何のために、農学部に入ったと思つてるんだい？ 将来、家

の仕事に役立てるためだよ。その気持ちは今でも変わらない。
優しいな、おまえは。

優作
雅俊
（美栄子に）でも、今、一番やりたいことは研究なんだ。先生に頼まれたからじゃない。僕自身がやりたいんだ。

優作
美栄子
（美栄子に）で、二番が小説。酪農はランク外だ。

優作
美栄子
雅俊、あなたは自分のことしか考えてないのね。

美栄子
人間ていうのはそういうものだろう。
（雅俊に）たまには私やお父さんのことも考えて。あなたが跡を継いでくれなかつたら、うちの牧場はどうなるの？

優作
雅俊
せっかく引き取ってやったのに、恩を仇で返すのかって言いたいのか？

雅俊
（美栄子に）僕を引き取ってくれたことは感謝してる。大学院まで行かせてくれたことも。でも。

優作
でも？

美栄子
（雅俊に）でも、何よ。

雅俊
僕はユウちゃんも引き取ってもらいたかった。

優作
バカ。今さら、そんなことを言つて、何になる。

美栄子
（雅俊に）それは何度も説明したでしょう？ 家には子供を二人も引き取る

余裕はなかった。だから、ユウちゃんは川崎の兄さんにお願ひしたの。

そんなことはわかつてるよ。それでも、僕はユウちゃんと別れたくなかつた

んだ。

美栄子
あなた、私たちを恨んでたの？

雅俊
恨んでないよ。

美栄子
だから、今になって、復讐しようって言うの？

雅俊　　違う。僕はただ、あと二年延長してほしいって言ってるだけで。
美栄子　　これだけ言ってもわからないなら、好きにしなさい。でも、お金の援助はも

優作　　うできない。生活費も授業料も、全部自分で何とかして。

美栄子　　ほら、いよいよ奥の手を出してきたぞ。
優作　　（雅俊に）私の意見を無視して、東京に残るんだもの。文句はないよね？
美栄子　　そう言えば、諦めて、家に帰ると思ってるんだらう？　　言ってやれ、マサ。

美栄子　　金なら、家庭教師と塾教師と小説で稼ぎますって。
優作　　どうなの、雅俊？
美栄子　　言ってやれ、マサ。僕は小説家になりますって。

チャイムの音。

美栄子　　誰かしら。ひよつとして、彼女？
優作　　あんた、まだ疑ってるのか？　　マサが東京に残るのは女のためだって。

雅俊がドアを開ける。雨が立っている。

雨　　こんにちは。

優作　　よう、雨ちゃん。

雨　　（雅俊に）あれ？　　お母さんがいらっしやっただんですか？

雅俊　　用は何？

雨　　雅俊さんにお願いがあって。実はホツくんのお母さんに雅俊さんのことを話
したら、サインがほしいって言うんです。それで、もしよかったら、この本

に。(本を差し出す)
いいよ。(受け取って)でも、僕はこれから出かけるんだ。今晚中に書いて

おくから、明日取りに来てくれないか？
わかりました。

雨
雅俊 (美栄子に) じゃ、僕は出かける。

美栄子 まだ話の途中よ。

雅俊 先生が遅刻するわけには行かないんだよ。行ってきます。
雨 行ってらっしゃい。

雅俊が去る。

美栄子 何よ。都合が悪くなると、すぐに逃げるんだから。

優作 誤解するな。マサはあんたを傷つけたくなかったんだ。

雨 (美栄子に) それじゃ、私はこれで。

美栄子 ちよつと待って。あなたは確か、雨さんだったよね？

雨 そうです。この部屋の隣に住んでいます。

美栄子 あなたのお部屋が見てみたいな。ちよつとお邪魔してもいい？

雨 ええ、別に構いませんけど。

美栄子 あら、いいの？ じゃ、遠慮なく。

雨・美栄子が去る。

優作 (本を手を取って) 今年中にあと三冊出さなきゃって言ってたな。いくつか

ネタでも考えてやるか。

優作が去る。
② 雨の部屋。雨・美栄子がやってくる。

雨 美栄子 だから、それは誤解なんです。私と雅俊さんはただの友達で。

美栄子 じゃ、雅俊のことは何とも思っていないの？

雨 何ともってことはないですよ。雅俊さんの小説には本当に感動しました。小説家として、凄い人だと思ってます。

美栄子 男としては？

雨 美栄子 素敵な人だと思ってます。でも、これは好きっていうより、憧れって感じで。雅俊が家に来たのは八歳の時だったんだけどね。近所の小学校に入学したら、

雨 すぐにファンクラブができたの。栗原雅俊ファンクラブ。

美栄子 同級生が作ったんですか？

雨 美栄子 そう。でも、上級生や下級生も入ってたみたい。あと先生も。

美栄子 先生まで？

雨 美栄子 そのファンクラブは、雅俊が高校を卒業するまで続いたのよ。会員が増えて、会報誌まで発行するようになった。月刊栗原雅俊。

雨 美栄子 バックナンバーを読んでみたいですよ。

雨 美栄子 あの子は頭だけじゃなくて、性格もいいからね。若い女の子が憧れるのは当然なのよ。だから、あなたの気持ちはよくわかる。

雨 美栄子 雅俊さんにとっては、ファンの一人に過ぎないってことですね。

美栄子 それは本人に聞いてみないとわからないけど。

雨 今、雅俊さんが家に来たのは八歳の時だったって仰いましたよね？ という

美栄子 ことは、お母さんは本当のお母さんじゃないんですか？

雨 私は、雅俊が書いた小説の中に出てくる、苦小牧のお婆さん。

美栄子 ああ、最後の方に出てくる、元気なお婆さん。名前は確か――

雨 栗原美栄子。雅俊の母親の姉よ。

美栄子 やっぱり、『ユウとマサ』は実話なんですね。

雨 小説にするなら、名前や地名を変えるとか、少しは周りの人間に気を遣うベ

美栄子 きだと思わない？ でも、雅俊は全部、実際の名前を書いた。たぶん、雅俊

雨 は小説じゃなくて、記録として書いたんだと思う。

美栄子 記録？

雨 自分の経験を遺すために。

美栄子 雅俊さんは自分のために書いたってことですか？

美栄子 ううん、亡くなった優作のためよ。

雨・美栄子が去る。

① 雅俊・優作がやってくる。本を開いて、読む。

雅俊・優作

「はい、どちら様ですか？」という声がして、ドアが開いた。お母さんだった。髪の毛が真っ黒になって、お化粧が薄くなっていたけど、間違いない。お母さんだった。僕が「お母さん」と言うとお母さんは慌てて外に出てきて、ドアを閉めた。そして、小声で「何しに来たの」と言った。お母さんは怒っていた。僕は何も言えなくなつた。すると、ユウちゃんが「マサがお母さんに会いたいわつたから」と言った。お母さんはユウちゃんを睨みつけて、「私は苦小牧のお婆さんの所へ行きなさいと言つたはずよ」と言った。「帰つて」と言った。「私はもうあんたたちの母親じゃないの」と言った。その時、部屋の中から「ママ」と呼ぶ声が聞こえた。小さな女の子の声だった。お母さんは財布から一万円札を取り出して、ユウちゃんの手握らせて、「二人で来られたんだから、二人で帰れるよね？」と言つた。そして、ドアの中に消えた。カチャリと鍵を締める音が聞こえた。何が何だか、わからなかつた。僕はユウちゃんに「お母さんは？」と聞いた。ユウちゃんは「一万円札をクシャッと丸めて、床に捨てた。そして、僕の右手を握つて、「帰ろう」と言つた。僕は、せつかくお母さんに会えたのにどうして、と思つた。でも、ユウちゃんは僕の手を引っ張つて、アパートの階段に向かつた。

四月二日夜、雨の部屋。雨・北斗がやってくる。

北斗 何だよ、相談したいことって。

雨 雅俊さんのこと。今、雅俊さんの所に、苦小牧からお母さんが来てるんだけどね。

北斗 え？ 雅俊さんのお母さんて、雅俊さんを捨てて、東京へ行ったんじゃないのか？

雨 もしかして、『ユウとマサ』、まだ読んでないの？

北斗 今、二人が盛岡に着いた所だ。そこから説明しなきゃいけないの？ じゃ、思いっきり端折るけど、二人が八王子のお母さんの家に辿り着くと、お母さんは新しい家族と暮らしてたの。

雨 それで、二人は追い返された。それで、二人は母親だ。そいつが今、雅俊さんの所に来てるのか。

北斗 違う。追い返されたユウとマサは、東京駅に行くの。札幌に帰るために。でも、お金が足りなくて、切符が買えなかった。だから、ユウはよその人の財布を盗もうとした。でも、すぐに捕まっちゃって、二人は駅の交番に連れて

雨 いかれた。そこで二人が札幌から来たことがバレて、苦小牧のおばさんに連絡が行ったの。

北斗 苦小牧のおばさん？ 八王子のお母さんじゃなくて？

雨 ユウはお巡りさんに、お母さんのことは話さなかったの。お母さんに、「もうあんたたちの母親じゃない」って言われたから。

北斗 で、かわりにおばさんが迎えに来たわけか。

雨

ユウとマサにはおじさんとおばさんがいたの。ユウは川崎のおじさんに引き取られた。マサは苦小牧のおばさんに引き取られた。今、雅俊さんの所に來てるのは、そのおばさん。今はお母さんて呼んでるけどね。

そこへ、美栄子がやってくる。

美栄子

優作は小さい頃から乱暴な子でね。とてもじゃないけど、私たち夫婦には育てられないと思った。それで、川崎の兄に頼んだのよ。兄には三人も子供がいて、いやがられたんだけど、三人も四人も大して変わらないでしょって。

雨 美栄子

お兄さんはどんなお仕事？
夫婦で定食屋をやってる。子供たちは誰も跡を継がないで、家を出ていっちゃった。だから、いまだに二人でやってるのよ。七十までは頑張るって言ってる。

雨 美栄子

優作さんはベイスリストになったって聞きましたけど。
なっていない、なっていない。高校を卒業した後は、いわゆるフリーター。何しろ、口より手が先に出る子だからね。どこに勤めても、すぐに喧嘩してクビ。まあ、音楽だけはずっと続けてたみたいだけど、結局、目が出なかった。

雨 美栄子

そうよ。場所は盛岡。
盛岡？ どうしてそんな所で？

雨 美栄子

優作は毎年一回、苦小牧に來たの。雅俊に会いに。最初に來たのが、雅俊を引き取ってから一年後。お金を貯めて、電車で來たの。高校を卒業してからはバイクで來るようになって。

雨 美栄子

川崎から苦小牧まで？ 何時間かかるんです？
どんなに飛ばしても、丸一日はかかる。危ないからやめろって何度も言ったのに、全然聞く耳を持たなかった。

雨 美栄子

じゃ、その途中で？
雅俊が大学に合格して、上京する時。優作は雅俊を迎えに来たのよ。雅俊は優作の部屋に居候することになってたから。

雨 美栄子

このアパートですわね？
そう。一緒に暮らすのは十一年ぶり。二人ともうれしかったんでしょね。東京までバイクに二人乗りして行くって言い出した。その時も、私はやめろって言ったのよ。でも、優作は雅俊を後ろに乗せて、出発した。警察から電話がかかってきた時は、心臓が止まるかと思った。

雨 美栄子

じゃ、雅俊さんも一緒に事故に？
玉突き事故に巻き込まれたのよ。でも、雅俊は奇跡的に軽傷で済んだ。優作が庇ってくれたんだって。そのことだけは優作に感謝してる。

雨 美栄子

事故に遇わなければ、また一緒に暮らせただけ、心は別だもの。病院私は雅俊のことが心配だった。体は軽傷で済んだけど、心は別だもの。病院に入院してる間は、まるで半分死んだようだった。私は苦小牧に帰ってこいって言ったの。大学に入学するのは一年先に伸ばさせて。でも、雅俊はこのアパートで暮らし始めた。そうしたら。

雨 美栄子

そうしたら？
雅俊は見違えるように元気になったの。優作の死を乗り越えたのよ。ユウちゃんの死を乗り越えたんじゃない。雅俊さんの前に、ユウちゃんの幽霊が現れたんだ。

雨 北斗 私もそう思った。でも。

雨 北斗 でも、何だ？

雨 北斗 ホックんに相談したかったのは、このことなの。ホックん、ユウちゃんの幽霊って、本当にいるのかな。

雨 北斗 今さら何を言ってるんだ。最初に信じたのはおまえだろう。

雨 北斗 私、お母さんに言っちゃったの。雅俊さんが元気になったのは、ユウちゃんの幽霊が現れたからじゃないかって。すると、お母さんは大笑いして。

雨 美栄子 幽霊なんているわけじゃない。

雨 美栄子 でも、雅俊さんにはユウちゃんが見えます。話もできるんです。

雨 美栄子 雅俊がそう言ったの？

雨 美栄子 はい。

雨 美栄子 信じられない。二十三にもなって、またそんなことを。

雨 美栄子 またって？

雨 美栄子 あの子は子供の頃も同じことをしてたのよ。あの子が家に来て、一カ月ぐらいたったかな。いつの間にか、独り言を言うようになったの。よく聞いてみると、誰かと話をしてるみたいで。

雨 美栄子 それが優作さんだったんですか？

雨 美栄子 そう。まるでそこに優作がいるかのように話しかけて。一年経って、優作が苦小牧に来たら、自然とやらなくなっただけだね。

美栄子が去る。

北斗 参ったな。お母さんの言ったことが事実なら、雅俊さんの話は全部妄想だっ

② 雅俊の部屋。雅俊がやってくる。

雨 北斗 北斗 北斗 雨 北斗 雨 北斗 雨 北斗 雨 北斗 雨 北斗 雨 北斗 雨 北斗 雨 北斗

てことになるぞ。

でも、妄想にしては、あまりに真に迫ってない？

当たり前だ。本人は事実だと思ってるんだから。

でも、雅俊さんは冷静だった。おかしなところは何もなかった。

それはおまえが気づかなかっただけだ。たとえば、俺の彼女の翔子だけだな、実際には存在しない。

え？

翔子の話は全部、俺の妄想なんだ。でも、おまえは存在すると思ってただろう？

もちろん。

それは、俺がそんな彼女がいたらいいなって心の底から思ってたからだ。

私のこと、騙してたの？

俺を責めるのはまた後にしろ。今は雅俊さんをどうするかだ。雨、おまえはユウちゃんを弾くのを聞いたんだよな？

うん。でも、それは自分の部屋にいる時。雅俊さんの部屋に行った時は、弾いてくれなかった。

朝晴さんは物を持ち上げたり、動かしたりすることができた。ユウちゃんは？

私は見てない。

一度も？

私の前では話をしただけ。

確かめてみよう。雅俊さんの部屋に行くんだ。

雅俊 北斗 雨 雅俊 雨 雅俊 北斗 雅俊 北斗 雅俊 北斗 雨 雅俊 北斗 雅俊

こんな時間にどうしたんですか？ もう十一時を過ぎてますよ。すみません。ちよつと急ぎの用があつて。

雅俊さん、お母さんは？

母は駅前のホテルに泊まつてるんだ。ここには布団が一組しかないからね。ユウちゃんは？

さあ。家庭教師から帰ってきた時にはいませんでした。外へ出かけたつてことですか？

だと思いません。ユウちゃんは子供の頃から僕の母が苦手で。二人だけになるのがいやだったんでしょう。

ユウちゃんの行き先は？

わかりません。たぶん、近所を散歩してるんじゃないかな。でも、どうして

そんなことを聞くんですか？

雅俊さん、ユウちゃんはいつ雅俊さんの前に現れたんですか？

それは、幽霊のユウちゃんがつてこと？

そうです。

五年前だよ。葬式の後、この部屋に来たら、中にいたんだ。僕が「ユウちゃん、生きてたの？」つて言ったら、「そんなわけないだろ」つて頭を叩かれた。

ユウちゃんは雅俊さんの頭を叩けるんですね？

（雅俊に）物を持ち上げたり、動かしたりすることは？

できますよ。本人の話によると、気持ちによつて、切り換えるんだそうです。たとえば、ここに椅子があると、この椅子を持つとうと思えば、持つことができ

北斗
雅俊

る。持とうと思わなければ、手は素通りする。
でも、雨の前では一度も物を持ってないですよ？
そうだったかな。

雨
雅俊

私がベースを弾いてほしいって言ったら、ユウちゃんは断った。

北斗

それは、桜井さんのお父さんと比較されなくなかったからだよ。ユウちゃん
は口は悪いけど、シャイなんだ。

雅俊
北斗

雅俊さん、よく思い出してください。ユウちゃんが物を持ち上げたり、動か
したりするのは、雅俊さんしかいない時じゃないですか？

雅俊
北斗

それはどういう意味ですか？
他の人間がいる時は、ユウちゃんは何もしない。それって、おかしくないで
すか？

雅俊

すみません。僕にはあなたが何を言いたいのか、わからない。
嘘だ。あなたにだって、本当はわかってるんだ。ユウちゃんはあなたの心の
中にしか存在しないって。
僕の心の中にしか存在しない？

そこへ、優作がやってくる。

優作
雅俊

マサ、こいつは俺がおまえの妄想だって言いたいんだ。
妄想？ ユウちゃんが？

雨
優作

雅俊さん、ユウちゃんが帰ってきたんですか？
（雅俊に）やっぱり、他のやつらと同じだ。おまえの話を信じてなかったん
だ。

雨 北 優 北 優 北 雅 北 雅 北 雅 北 雅 雨 雅 雨 雅
斗 作 斗 作 斗 俊 斗 俊 斗 俊 斗 俊 斗 俊 俊 俊 俊 俊

(雨に) そうなの？

何がですか？

君は僕の話を通じてなかったの？ ユウちゃんがここにいてるってこと。

一度は信じました。でも、雅俊さんのお母さんが言ってたんです。雅俊さんは子供の頃、いないはずのユウちゃんと話をしてたって。

あれはただの遊びだよ。ユウちゃんが目の前にいるフリをして、遊んでたんだ。

じゃ、今は。

ユウちゃんはどこにいる。僕の目の前に。

それは雅俊さんがそう思ってるだけじゃないですか？

違う。

それなら、ユウちゃんに言うてください。ベースを弾いてくれて。

誰がおまへの頼みなんか聞くか。

(雅俊に) どうしたんですか？ 早く頼んでください。

ユウちゃんには弾かないって言ってます。

ほら、僕の言った通りじゃないですか。ユウちゃんは、他の人間がいる時は、

何もしない。したくても、できないんです。なぜなら、ユウちゃんはあなたの妄想だから。

黙れ。

(雅俊に) 認めてください、雅俊さん。ユウちゃんはあなたの妄想だって。

黙れ。

(雅俊の腕をつかんで) 雅俊さん、お願いです。ホッくん、もうやめて。

優作が北斗の肩をつかみ、顔を殴る。北斗がよろめく。優作が北斗を何度も殴る。北斗が倒れる。雅俊が優作の腕をつかむ。

雅俊 ユウちゃん、それ以上やったら、死んじやうよ。

優作 (北斗に) これで信じる気になったか。

雨 (北斗に駆け寄り) ホックくん、大丈夫？

優作 俺はここにいます。マサを守るために。マサを傷つけるやつは絶対に許さない。

雨・雅俊が北斗の体を支えて、去る。優作も去る。

①美栄子がやってくる。本を開いて、読む。

美栄子

僕たちは八王子駅行きのバスに乗った。ユウちゃんは僕を窓際の席に座らせてくれた。外はもう真っ暗だった。僕が「どこに行くの？」と聞くと、ユウちゃんは「札幌に帰るんだ」と答えた。「お母さんは？ 後から来るの？」と聞くと、「お母さんは来ない。二人だけで帰るんだ」と答えた。「その後には？」と聞くと、「俺たちは二人だけで暮らすんだ」と答えた。それで僕はやっとわかった。やっぱり、僕たちは捨てられたんだ。お母さんはもう僕たちのお母さんじゃない。あの女の子のお母さんになったんだ。目の前の景色がグルグル回って、気が遠くなつた。僕は必死でユウちゃんの腕をつかんだ。僕は「ユウちゃん」と言った。「ユウちゃん、ユウちゃん」と言った。僕の体はガタガタ震えていた。ユウちゃんが僕の肩に手を回して、強くつかんだ。そして、「泣くな、マサ」と言った。知らない間に、涙がたくさん出ていた。鼻水も出ていた。でも、ユウちゃんは泣いてなかった。ユウちゃんはどんなに苦しんでも、絶対に泣かないんだ。「心配するな」とユウちゃんが言った。「俺たちは二人だけで生きていける。札幌から八王子まで、二人だけで来られたんだから」と言った。「俺たちは何だってできる。二人で力を合わせれば」

四月二日夜、雨の部屋。雨・雅俊が北斗の体を支えて、やってくる。北斗を椅子に座らせる。雨が去る。

北斗 雅俊さん、ユウちゃんの身長は何センチですか。

雅俊 僕と同じぐらいですよ。

北斗 体重は。

雅俊 僕より若干重いかな。でも、それが何か？

北斗 いや、物凄い力だったから。姿が見えないんで、二メートルぐらいの大男を

想像しちゃいました。ラオウみたいな。

雅俊 ラオウ？ どの国の人ですか？

そこへ、雨がやってくる。水に濡らしたタオルを持っている。

雨 北斗 (タオルを差し出して) ホックン、これ。

雨 北斗 (受け取って) ありがとう。(タオルを顔に当てて、呻く)

雨 北斗 痛い？

雨 北斗 ちよっと染みただけだ。骨に異状はない。

雨 北斗 体の方は？ 病院に行かなくていいの？

雨 北斗 必要ないだろう。何とかここまで歩けたし、こうして話もできるし。

雨 北斗 すみませんでした。兄が乱暴な真似をして。

雨 北斗 いや、ユウちゃんが怒るのも、無理ないですよ。僕はユウちゃんを妄想扱い

雨 北斗 したんだから。

雨 雅俊

雨 北斗

雨 雅俊 雨 雅俊

雨 雅俊 雨 雅俊

北斗 雅俊 北斗

雅俊さん、疑って、すみませんでした。

僕に謝る必要はないよ。母からあんな話を聞かされたら、疑いたくもなる。でも、問題はユウちゃんだな。

私、ユウちゃんにも謝ります。ホックくんも一緒に来て。

俺も謝れって言うのか？ そりゃ、妄想扱いたしたのは悪かったけど、これだけ殴られたんだ。罰は十分に受けたと思うけど。

わかった。じゃ、私一人で行ってくる。

君の気持ちは僕から伝えておく。だから、この件はもうおしまいにして。でも。

それでね、桜井さん。君にお願いがあるんだけど、僕の部屋にはもう来ないでほしいんだ。

私のこと、許してくれないんですか？

そうじゃない。君はこれ以上、僕とユウちゃんに関わらない方がいいんだ。どうして。

僕とユウちゃんがここで暮らし始めて、五年経つ。その間に、僕はいろんな人と知り合いになった。大学の同級生、先輩、後輩、アルバイトの仲間。み

んないい人で、僕に親切にしてくれた。でも、中には嘘をついたり、僕の邪魔をする人もいた。そのことをユウちゃんに話したことはない。でも、ユウ

ちゃんはいつの間にか知ってるんだ。それで。

その人たちを、俺みたいにボコボコにしたんですか。

中には大怪我をして、入院した人もいます。その人は交差点で信号待ちをしている時、いきなり後ろから押されたんです。

ユウちゃんはその人を殺すつもりだったんですね？

雅俊 わかりません。ユウちゃんは自分がやったって認めないんで。

雨 他の人がやった可能性はないんですか？

雅俊 ない。その人は一人で立ってたんだ。

北斗 参ったな。下手をしたら、俺も殺されるところだったんだ。

雅俊 (雨に) ユウちゃんは僕を守るためなら、何でもする。僕にはそれが止められない。僕と関わるのは危険なんだ。

雨 でも、私はこれから雅俊さんに会いたいです。せつかくこうして仲良くなれたんだから。

雅俊 それは僕も同じだよ。でも、僕のことには忘れてほしい。

北斗 (雨に) 雅俊さんの言う通りにした方がいい。その方がおまえのためだ。

雨 でも、雅俊さんは？ (雅俊に) これからずっと、ユウちゃんと二人だけで生きていくんですか？

雅俊 そうだよ。

雨 本当にそれでいいんですか？ 寂しくないんですか？

雅俊 どうして寂しいんだい？ 僕にはユウちゃんがいるのに。

雅俊が去る。

雨 雅俊さん！

北斗 追うな、雨。

雨 でも。

北斗 雅俊さんはおまえを傷つけたくないんだ。おまえを守るために、忘れてほし
いって言ったんだ。

雨　でも、私は隣の部屋に住んでるんだよ。しよっちゅう顔を合わせるのに、忘れられると思う？

北斗　だったら、引越せばいい。俺の家に来い。

雨　ここに来てから、まだ二週間しか経ってないのに。

北斗　そうだ。ということは、おまえが雅俊さんと付き合ったのも、たったの二週間だったってわけだ。二週間なら、すぐに忘れられる。

雨　無理よ。

北斗　好きなのか、雅俊さんが。

雨　わからない。でも、私には雅俊さんが放っておけないの。だって、とつても寂しそうだから。

北斗　雅俊さんは寂しくないって言ってたじゃないか。

雨　本心なのかな？　雅俊さんはユウちゃんがいれば、それでいいのかな？

雨・北斗　雨・北斗が去る。

②　四月三日朝、アパートの前。中から、傘を持った雅俊がやってくる。外から、傘を差した美栄子がやってくる。二人が話しているところへ、傘を持った雨がやってくる。二人

の脇を通りすぎようとする。美栄子が雨に話しかける。雨が立ち止まる。雅俊が美栄子を促す。美栄子が中に入る。雅俊も中に入ろうとして、立ち止まり、雨の方を振り返る。

外から、優作がやってくる。優作が雅俊を促す。優作と雅俊が中に入る。雨が傘を差して、外へ去る。

③　雅俊の部屋。雅俊・美栄子がやってくる。

美栄子　あなた、雨ちゃんと喧嘩でもしたの？

雅俊
美栄子

してないよ。

でも、さっき、口をきこうとしなかったじゃない。昨夜、私がホテルに行つた後、何かあったの？

雅俊

お母さん、彼女に話したんだね。僕の子供の頃のこと。

美栄子

栗原雅俊ファンクラブのこと？

雅俊

そんな話もしたの？

美栄子

あの子が聞きたがるから、ついいろんなことを。まずかった？

雅俊

まずくはないけど、彼女はお母さんの話を聞いて、誤解したんだ。僕が妄想

美栄子

に囚われてるって。

雅俊

妄想って？

美栄子

でも、誤解はすぐに解けた。だから、僕と桜井さんの間には何の問題もない。

美栄子

だったら、いいけど。それで、昨日の話の続きだけだね。ホテルに行った後、

お父さんに電話で報告したのよ。雅俊の考えは変わらないみたいだって。でも、お父さんも同じ。今度と言う今度は許さない。修士課程が終わったら、すぐに家に帰ってこいって。

雅俊

断ったら？

美栄子

それは昨日言ったでしょう？ お金の援助を打ち切る。

雅俊

お母さん、僕はアルバイトで、家庭教師を四件やることにした。それから、

塾を一件。それで、生活費は何とかなると思う。

でも、授業料は？

出版社の人と相談して、すぐに二作目を書くことにした。

本の印税なんて、大した額にはならないでしょう。

美栄子

雅俊

雅俊 一冊だけならね。でも、僕の計算だと、一年の間に四冊書けば、授業料は賄

える。

美栄子 そんなに書いて、勉強する暇はあるの？

雅俊 何とかする。

美栄子 じゃ、援助を打ち切られても、家には帰らないって言うのね？

雅俊 博士課程が終わるまでは。終わったら、必ず帰る。

美栄子 嘘よ。

雅俊 嘘じゃない。

美栄子 あなたは家に帰るつもりなんかない。勉強するつもりもない。本当は小説家になりたいのよ。私とお父さんを捨てるつもりなのよ。

そこへ、優作がやってくる。

優作 悪いが、マサのことはもう諦めてくれ。

美栄子 (雅俊に) あなたが家に来た日から、あなたのことは実の息子だと思ってきた。だから、あなたが東京の大学に行きたいって言い出した時も、あなたの

好きなようにさせた。あなたに幸せになっただけだから。

嘘をつけ。あんたたちはマサに投資しただけだろう。

(美栄子に) 僕は必ず帰るって言ったはずだよ。

その約束もどうなるかわからないけどな。

(雅俊に) そんな約束、信じられない。あなたが守るわけない。

その通り。マサは東京で小説家になるんだ。

(美栄子に) 小説はどこでも書ける。苫小牧で、家の仕事をしながらだって

雅俊

優作

美栄子

優作

雅俊

美栄子

優作
雅俊

書けるんだ。
バカ、そんなの無理に決まってるだろう。
そんなことない。今は專業作家より、別の仕事を持つてる作家の方が多いんだ。

優作

どうせプロになるなら、專業作家を目指せ。
專業作家になれるのは、ベストセラーを連発する人だけだ。

優作

連発すればいいじゃないか。おまえならできる。
無理だよ。僕にはそんな才能はない。

優作

なぜそう言い切れる。
だって、『ユウとマサ』だって、半分はユウちゃんが書いたものじゃないか。

美栄子

雅俊、あなた、誰と話をしてるの？
マサ、おばさんに言え。僕は專業作家になる。認めてくれないなら、縁を切るって。

美栄子

雅俊、聞いてる？

優作

(雅俊に) おばさんがどうなってもいいの？

美栄子

(雅俊に) まさか、あなた、ユウちゃんと話をしてるの？

雅俊

お母さん、僕は專業作家になりたいんだ。認めてくれないなら、縁を切るよ。
雅俊。
ごめん。

優作

バカ、謝るな。おまえはおまえのやりたいことをやればいいんだ。

美栄子

(雅俊に) あなたの気持ちはよくわかった。苦小牧に帰って、お父さんと相談する。

雅俊
優作

ありがとう。
心配するなよ、おばさん。マサは俺が必ず一人前の小説家にしてやるから。

雅俊・美栄子が去る。

① 優作が本を開いて、読む。

優作

「ユウちゃんは どうして泣かないの？」と僕は聞いた。「それはおまえがいるからだ」とユウちゃんは答えた。「僕に見られるのが恥ずかしいの？」と僕は聞いた。「そうだ」とユウちゃんは答えた。「俺は乱暴で、嘘つきで、泥棒で、嫌われ者だけど、おまえにだけは嫌われたくないんだ。おまえにだけは尊敬してほしいんだ」とユウちゃんは言った。「僕はユウちゃんを尊敬してるよ」と僕は言った。「本当か？」とユウちゃんが聞いた。「本当だよ」と僕は答えた。ユウちゃんはニッコリ笑って、僕の手を握った。そして、バスを降りて、駅に向かって歩き出した。僕はもう何も怖くなかった。

優作が去る。

四月三日昼。アパートの前。雅俊・美栄子がやってくる。

美栄子

雅俊、今日は送ってくれなくていいよ。

雅俊

僕が言ったこと、怒ってるの？

美栄子

それとこれとは関係ない。あなた、何だか疲れてるみたいだから。

雅俊

疲れてるのはお母さんの方だろう？ やっぱり、羽田まで一緒に行くよ。

美栄子

昨日、あなたが家庭教師に出かけた後、雨ちゃんと話をしたのよ。その時、雨ちゃんが、あなたは優作と暮らしてる、あなたには優作が見えるって言った。それは本当のことなの？

雅俊

もし本当だとしたら、お母さんは信じる？

美栄子

信じるわけないでしょう。でも、このままあなたを放っておくわけには行かない。病院へ連れていく。

雅俊

その必要はない。お母さんだって、知ってるだろう？ 僕が子供の頃、透明

美栄子

なユウちゃんと話をしたこと。

雅俊

それじゃ、さつき話しかけてたのは？

美栄子

ユウちゃんの声が聞こえた気がしたんだ。でも、それは気のせいだってことはよくわかってる。

雅俊

本当ね？
僕は大丈夫。心も体も健康そのものだよ。

雅俊がしやがみ込む。

美栄子

雅俊！

雅俊

……

美栄子

どうしたの、雅俊？ 苦しいの？ 返事をして。

雅俊

大丈夫。

美栄子

何が大丈夫なんですか。あなた、顔が真っ青じゃないの。

雅俊

急に体の力が抜けちゃって。

美栄子

病院へ行こう。今、タクシーを呼んでくるから。

そこへ、雨がやってくる。

雨

美栄子

どうしたんですか？

雨

美栄子

この前と同じですね。

美栄子

この前って？

雨

美栄子

二週間ほど前です。場所はやっぱりここで。あの時はすぐに回復しましたけど。

雅俊

美栄子

昨夜も徹夜したんだ。寝れば、治る。

雅俊

美栄子

念のために、病院へ行こう。

雅俊

美栄子

その必要はない。僕は病気じゃないんだから。

雅俊が立ち上がる。が、またすぐにしやがみ込む。

美栄子

雅俊！

雅俊

美栄子

悪いけど、羽田には行けない。僕は部屋に戻る。

雅俊

美栄子

行っても無駄だよ。貧血だって言われるだけだ。

雨

雅俊

前にもそう言われたんですか？

雨

雅俊

一年前だ。その時、検査してもらった。脳も内臓も異状はなかった。

雨

雅俊

お医者さんは何が原因だって言っていましたか？

雨

雅俊

精神的な疲労によるものだろうって。

雨 私もそう言われました。五年前、貧血で倒れた時。
美栄子 (雅俊に) 今度も同じだとは限らない。もう一度、病院へ行って、検査して

もらおう。

雨 雅俊さん、部屋の鍵を貸してください。

雅俊 何をするつもりだ。

雨 話をするんです。ユウちゃんと。失礼します。

雨が雅俊のポケットから鍵を取り出す。雨が去る。

美栄子 あの子、今、何て言った？ 誰と話をするって？

雅俊 ユウちゃんだよ。

美栄子 どうして優作と話ができるのよ。あの子、一体、どうしちゃったの？

雅俊 桜井さんが危ない。(立ち上がる)

美栄子 雅俊。

雅俊 部屋に行きたい。お母さん、手を貸して。

② 雅俊・美栄子が去る。

② 雅俊の部屋。雨がやってくる。

雨 ユウちゃん？ ユウちゃん？ いるんでしょう？ 私の話を聞いて。

そこへ、優作がやってくる。

雨 たった今、アパートの前で、雅俊さんが貧血になった。話を聞いたら、一年

優作 前から何度もそうなってるんだって。

雨 それがどうかしたか。

優作 ユウちゃんは雅俊さんに触らないって言ったよね？ でも、五年も一緒に暮

雨 らしてたら、影響は出るんじゃない？

優作 俺がマサの生命力を奪っていったって言うのか。

雨 今の状態を続けたら、雅俊さんの体はもつと衰弱する。重い病気になるかも

優作 しれない。突然、心臓が止まるかもしれない。そうなってもいいの？

雨 オーバーなことを言うな。おまえの言ってることには何の根拠もない。

優作 お願い、ユウちゃん。天国へ行つて。

雨 何だと？

優作 やつぱり、幽霊はいつまでもこの世にいちやいけないんだよ。雅俊さんのこ

雨 とを思うなら、天国へ行つて。

優作 黙れ。

雨 雅俊さんはユウちゃんがいなくなっても大丈夫。雅俊さんを信じて。

優作 黙れ。

優作が雨の胸ぐらをつかむ。そこへ、雅俊・栄美子がやってくる。雅俊が優作を突き飛ばす。

優作 邪魔するな、マサ。

雅俊 ユウちゃん、桜井さんを傷つけるのはやめてくれ。

優作 こいつは俺に天国へ行けと言ったんだ。

雅俊
優作

彼女に悪気はないんだ。僕のことを心配してくれたただけで。そいつの肩を持つのか？ おまえも俺にここからいなくなれって言いたいのか。

雅俊
美栄子

まさか。僕はユウちゃんにいてほしい。

雨

雅俊、あなた、どうしちゃったの？ おかしなお芝居はやめて。お芝居じゃないんです。ユウちゃんは本当にそこにいるんです。

優作

（雅俊に）こいつはさつき、こう言ったぞ。おまえは俺がいなくなっても大丈夫だって。

雨

大丈夫なわけじゃないじゃないか。僕一人で何ができる？

雅俊

できますよ、何でも。研究、小説、家庭教師。普通の人よりたくさんことをやってるじゃないですか。

雨

何を言ってるんです。小説なんか、一作目で新人賞を取ったじゃないですか。ユウちゃんが手伝ってくれたから取れたんだ。

雨

研究は？ ユウちゃんが大学までついてきて、一緒に実験してくれましたか？

雅俊

僕の邪魔をする人間をすべて排除してくれた。そのおかげで、自分の思い通りにやれたんだ。

雨

じゃ、これからは？ これからも、ユウちゃんが必要ですか？

雅俊

決まってるだろう。僕はユウちゃんがいなかったから、今日まで生きてこられたんだ。

美栄子

雅俊、あなたはここで優作と暮らしてきたの？

美栄子

そうだよ。

美栄子

東京に残るって言ったのは、優作と暮し続けるため？

雅俊
美栄子

そうだよ。
でも、優作は死んだのよ。死んだ人間と暮らすなんて、そんなの間違ってるよ。

雅俊

お母さん、本当のことを言うよ。僕が今、一番やりたいのは研究じゃない。小説でもない。ユウちゃんと暮らすことなんだ。

雨

私もそう思っていました。それでも、私のお父さんは天国へ行った。私を幸せにするために。

雅俊

桜井さん、君と僕は違うんだ。

雨

何が違うんですか？

雅俊

僕は今は幸せなんだ。研究も小説もどうでもいい。ユウちゃんがいれば、それでいいんだ。

美栄子

そんなの間違ってるよ。

雅俊

お母さん、ごめん。でも、これが僕の本当の気持ちなんだ。だって、ユウちゃん、僕のために何でもしてくれた。札幌から東京まで連れて行ってくれた。

毎年、苫小牧まで会いに来てくれた。いくら兄弟だからって、ここまでしてくれる人間がどこにいる？

でも、間違ってる。雅俊さんは間違ってます。

桜井さん、もういいんだ。

ユウちゃんもそう思うでしょう？ 雅俊さんは間違ってますよね？

やめてくれ、桜井さん。

ユウちゃんがいればそれでいいなんて、絶対におかしい。そんなことを言わ

れて、ユウちゃんはどううれしいですか？

僕たちのことはもう放っておいてくれ。

雅俊

雨 雅俊 あなたは雅俊さんに幸せになってほしくないんですか？
雅俊 僕は幸せだ。さっき、そう言っただろう。
優作 マサ、貧血のこと、なぜ俺に言わなかった。
雅俊 別に大したことじゃないと思っただから。
優作 だったら、すぐに言ったはずだ。本当は、俺のせいだと思っただんじやないか？
雅俊 思っていないよ、そんなこと。
優作 じゃ、雨ちゃんの言ったことが事実だったらどうする。おまえを貧血にした
雅俊 のが、俺だったとしたら。
雅俊 別に気にしない。
優作 このまま一緒に暮らし続けたら、死ぬとしたら。
雅俊 構わないよ。僕には他にやりたいことなんてないし。ユウちゃんがいてくれ
れば、それでいい。

優作が雅俊を殴る。雅俊が倒れる。美栄子が雅俊に駆け寄る。

雅俊 何するんだよ。
優作 俺はよくない。おまえが死んだら、何の意味もないんだ。
雅俊 意味って何だよ。
優作 バカ。それぐらい、自分で考えろ。(ドアに向かって歩き出す)
雅俊 どこへ行くの？
優作 雅俊、雨ちゃんに聞いてくれ。天国へはどうやって行くんだ。
雅俊 いやだ。
優作 いいから、聞け。

雨 雅俊
優作 雅俊
優作 雅俊

（雨に）ユウちゃんが、天国へはどうやって行くんだって。
この世への心残りがなくなれば、自然と行けるんです。私の父はその瞬間に、
白い光に包まれました。そして、消えました。
そうか。意外と簡単なんだな。
ユウちゃん、僕は行ってほしくない。
おまへの指図は受けない。
ユウちゃん！

優作が去る。

① 北斗がやってくる。雨・雅俊・北斗・美栄子が本を開いて、読む。

四人

新宿の児童相談センターに来て、三日目。僕は苦小牧へ、ユウちゃんは川崎へ行くことになった。四日目の朝、苦小牧のおばさんが僕を迎えに来た。川崎のおじさんは仕事で忙しくて、すぐには来られないらしい。ユウちゃんはセンターの入口まで、僕を見送ってくれた。でも、入口を出たところで、僕の足は動かなくなつた。苦小牧のお婆さんは大好きだし、苦小牧の家も牛がいっぱいいいて楽しい。でも、どうしても行きたくなかつた。すると、ユウちゃんが僕の頭を叩いて、「しっかりしろ、マサ」と言った。僕は「手紙書いてね」と言った。ユウちゃんは「バカ、そんな面倒臭いことするわけないだろ」と言った。僕は悲しくなつて、下を向いた。すると、ユウちゃんがまた僕の頭を叩いて、「直接会いに行くよ、苦小牧へ」と言った。「アルバイトをして、金を貯めて、会いに行く」と言った。小学生がアルバイトなんかできるのかなと思つたけど、僕はすっかりうれしくなつた。だから、「いつ？」と聞いた。「なるべく早くだ」とユウちゃんが答えた。「待ってる」と僕は言った。ユウちゃんは黙つてうなずいた。その時、ユウちゃんの目が濡れているように見えた。でも、それは僕の見間違いだ。ユウちゃんが泣くわけない。僕は急いで「またね」と言つて、一人で歩き出した。

雅俊・美栄子が去る。
四月四日朝、雨の部屋。雨・北斗がやってくる。

雨 北斗

そうか。ユウちゃん、出ていったのか。
たぶん、そのまま天国へ行くつもりなんだと思う。ひよっとしたら、もう行
っちゃったかも。

雨 北斗

その方がいいんだ。死んだ人間がいつまでもこの世にいるのはおかしい。
で、ホックさんに聞きたいことがあるんだけど、全身の精密検査をしてくれる
病院を知らない？

雨 北斗

雅俊さんの体の状態を調べるんだな？
できるだけ早い方がいいの。何軒か電話してみたんだけど、みんな予約制で、
どんなに早くても一カ月先だって

雨 北斗

わかった。高校の同級生が今、横浜医大にいらんだ。すぐに頼んでみる。
ありがとう。でも、問題は雅俊さんなんだよね。いくら周りが騒いだって、
本人が行く気になつてくれないと。

雨 北斗

昨日の貧血はかなりひどかったんだろう？
だから、ユウちゃんが出ていった後、病院へ行こうって何度も言ったんだよ。
でも、雅俊さんは黙ったまま。

雨 北斗

シヨックだったんだろう、ユウちゃんとの別れが。
私、五年前を思い出した。お父さんと別れた日のこと。

雨 北斗

おまえ、よく乗り越えたな。まだ中学生だったのに。
ホックくん、それは誤解だよ。私はいまだに乗り越えてない。いまだに、「こ

ここにお父さんがいたら「って思う。二人で暮らしてた頃が懐かしい。でも、それじゃダメなんだ。そう思ったから、一人で暮らすことにしたの。

チャイムの音。

雨 あれ？ お客さんだ。

雨がドアを開ける。雅俊が入ってくる。

雅俊 こんにちは。

北斗 たった今まで、あなたの噂をしてたんですよ。体の具合はどうですか？

雨 貧血ですか？ 一晩寝たら、すっかり元に戻りました。でも、それで油断しちゃダメですよ。この際、体の隅々まで検査しておいた方がいいです。

雅俊 わかった、わかった。本当ですね？ 約束ですよ。

雨 それより、君に話したいことがあるんだ。昨夜、ユウちゃんが戻ってきたんだ。

雅俊 ユウちゃんが？ 天国へ行ったんじゃないかなかったですか？ 行こうとは思ったらしい。でも。

そこへ、優作がやってくる。

優作

優雅作

優雅作 優雅作 優雅作 優雅作 優雅作 優雅作 優雅作 優雅作

雨ちゃんが言っただろう。心残りがなくなれば、天国へ行けるって。で、心残りをなくすために、スカイツリーへ行っただ。前から一度、行ってみたくてな。で、ついに昇ったよ、地上四五〇メートル。歩いてきたよ、天望回廊。富士山がすぐそこに見えた。ところが、いつまで経っても、白い光に包まれない。天国に行けないんだ。ということは、俺にはまだ心残りがあるってことだよな？

それって、もしかして、僕？

そう、おまえだ。俺がいなくなっても大丈夫か。一人で生きていけるのか。富士山を見ても、房総半島を見ても、伊豆七島を見ても、気にかかる。だから、もう一度だけ、会うことにした。

会うだけ？ その後は？

天国へ行く。まあ、地獄って可能性も多少あるけどな。

そうだよ。地獄へ行くくらいなら、ここにいた方がいいよ。

それじゃ、おまえのためにならない。

なるよ。僕はユウちゃんにここにいてほしい。

マサ、おまえは今、いくつだ。

年？ 二十三だよ。

俺は二十二で死んだ。だから、いまだに二十二だ。おまえは俺より年上なんだよ。

知ってるよ、そんなこと。

おかしいと思わないか。弟の方が年上なんて。

そんなことないよ。自分の奥さんが自分より三つ年上で、奥さんの弟が奥さんの一つ年下だったら、弟は自分の二つ年上ってことになる。

優作 面倒臭いことをゴチャゴチャ言うな。とにかく、俺は天国へ行く。で、最後

雅俊 言いたいこと？

優作 これは命令だ。いいか、マサ。幸せになれ。俺と暮らしてた時の百倍も千倍

雅俊 千倍なんて無理だよ。

優作 次に会うのは六十年か七十年先だ。その時、「できませんでした」なんて言

雅俊 いやがったら、ぶん殴るからな。

優作 わかった。

雅俊 弟は兄の命令に従う義務がある。せいぜい精進しろ。

優作 優作が白い光に包まれる。

雅俊 ユウちゃん、光が。

優作 雨ちゃんが言った通りだな。じゃ、俺は行くぞ。

雅俊 ユウちゃん、またね。

優作 (うなづく)

北斗 優作が去る。

雅俊 (雅俊に) 凄い宿題を出されちゃいましたね。

千倍なんてムチャクチャですよ。大体、幸せの量なんて、どうやって計るんだ。単位はグラム？ カロリー？ ヘクトパスカル？

北斗 雨 雅俊
北斗 雨 雅俊
北斗 雨 雅俊
北斗 雨 雅俊
北斗 雨 雅俊

理系の人はそういうところにこだわるんですね。でも、雅俊さん、昨日より元気になったみたい。

最後にもう一度、ユウちゃんに会えたからね。ユウちゃんは笑ってた。それで何だか、ホッとしたんだ。

ユウちゃんは幸せだったんですよ。

雅俊さんと別れるの？

いや、僕もホツクんの言う通りだと思う。ユウちゃんは最後まで、僕を幸せにしようとした。それで自分も幸せだったんだ。

そうか、わかった。

何がわかったんだ、雨？

お父さんの宿題。(雅俊に) 私もお父さんに宿題を出されたんです。世界一幸せになれって。でも、どうすればそうなるのか、わからなかった。いくら考えてもわからなくて、苦しかった。

その答えが見つかったの？

今、雅俊さんが言ったじゃないですか。ユウちゃんは最後まで、僕を幸せにしようとした。それで自分も幸せだったんだ。

なるほど。自分以外の誰かを幸せにすればいいわけか。

桜井さん、僕は今から苦小牧に行ってくる。

どうしたんですか、急に？

両親に会って、修士課程が終わったら、苦小牧に帰るって言うってくる。

帰って、お父さんの跡を継ぐんですか？

僕はもともとそのつもりだったんだ。両親も喜ぶし、彼女も喜ぶ。

彼女って？

雅俊 僕には高校の頃から交際してる人がいるんだ。両親には内緒だけど。

雨 えー？

北斗 雅俊さん、その人は本当に存在するんですか？ 雅俊さんが存在するって思

雅俊 い込んでるだけじゃ？

彼女は妄想じゃない。地元の小学校で教師をしています。それじゃ、出かける支度をしないと。お邪魔しました。

雅俊が去る。

北斗

雨、泣くな。

泣くもんか。私はお父さんと約束したんだ。世界一幸せになるって。でも、一言だけ言わせて。雅俊のバカ！

雨がドアに向かって走り出す。北斗が雨の腕をつかみ、引っ張る。揉み合い。二人が顔を見合せ、笑う。